良いので、探知器代わりに使っています。

シーバーに音声がいっぱい入り出したら(シーバーの目盛で確認のこと)音声を絞り、シーバーを耳に当てて大声を発します。共猟者がいれば、各々が大声を発して探し、自分もしくは共猟者の声がマーカーに入り出したら、各々声の大小で調整しながら、探してみてください。

さて私の場合、翌日も出猟するときは、帰宅しても犬達を犬舎に戻さず、そのまま犬箱に泊まらせます。なぜなら、散歩のときに膝に負担がかかるからです。そして、翌朝は散歩なしで出猟し、車で走行しているときに犬達が鳴き出せば、急いでその場所を離れ、犬箱の中にドッグフードなどを撒き与え、食べ終えた頃にマーカーを装着し、排尿・排便をさせて昨日と同様にします。

もし犬達が鳴かない場合は、これまで10年と少しの経験と勘、および気象条件など総合判断で、できるだけ横着猟をするように心がけています。今まで入山した場所、および犬達が追って行って獲った場所は、自分の猟場に組み込みます。ただし、自分が出猟したとき、他の猟隊および他の猟人(鳥猟者であっても)が入っている場合は、自分は他の場所に移ります。安全が第一であり、それは人も犬も同じです。

他の猟隊および猟人に犬が狙われたら最期なので、気をつけてトラブルのない猟を目指してください。ちなみに、私の横着猟の成果は、平成15年度が102頭中27頭、16年度が100頭中35頭でした。

*質問・相談などがありましたら左記までどうぞ。

携帯:080-5610-0466
携帯:090-8719-3027

大切な猟場を未来につなげるために

神奈川 田宮 治

■困難をきわめた猟場確保

2005猟期も私は、基本的に大物(イノシシ)の単独猟である。孫と妻を相棒に、猟果にこだわらないゆとりの楽しい猟でいきたいと思っている。今猟期は、特に若犬の仕上げが多いので、ベテラン犬2~3頭に若犬2頭を連れての「流し猟」が主である。流し猟と言っても、猟場は知り尽くしているので(シシ様のお住まいの番地までわかっているので)、何の問題もない。

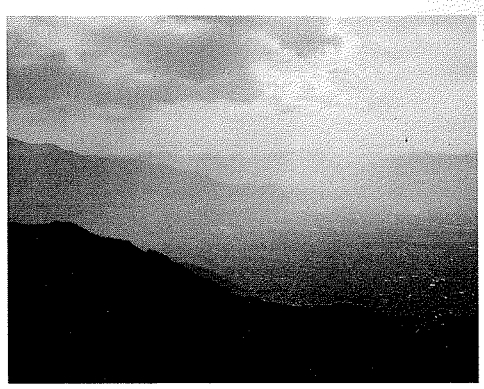
愛犬達も、オフ・シーズンに山引き完了。きちっと調整しているので、間違いなくイノシシを立ててくれるので、峰から攻めても谷から攻め込んでも、必ず「下の谷」で止めて撃たせてくれると思っている。そのための訓練を昨猟期の失敗をバネに重ねてきたのである。必ずこの苦労の先に何かが見えてくるであろうし、結果もついてくると信じている。

ただ私にとっての問題点は、「体調管理」と「猟場」である。体調は、粘り強く自分を戒めながら山歩きすることで何とかなるとして、残る「猟場」は、狩猟するうえで避けて通れない重要な課題となる。良い猟場がないことには、どんなに犬が良かろうと、猟技を磨こうと、猟にはならないからである。当然のことであるが、大切な猟場は、並みの努力で確保できるものではない。

特に、山のない都市に住む私などは、狩猟の歩みの中で一番の苦労と我慢が、まさにこの「猟場問題」であった。実に辛い長い年月だった。都市に住む狩人なら誰もが必ず体験してきたことで、運命(さだめ)のようなものである。頼りにならない猟場では、せっかく出猟しても、どこの山でもお決まりの「邪魔者は追い出せ」流の、「外様」扱いされるのが常である。

何とかして、この猟場問題を解決しないことには、「猟場を守る」とか「楽しい狩猟」などできない。当然のこと、私も辛い淋しい思いばかりで、地元の猟人のことばかり気にかけての我慢の猟をしてきたのである。

そんなことで、平成4年頃から豊かな大自然の獲物を求め「道東の地」を3年踏むことになるが、どうしても満足感は得られなかった。さらに、海外の最高の猟場で特大の獲物に挑戦してみようとまで思い、サコーの300ウインマグナム(ツアイスを付けて)を用意


筆者出猟の猟場全景（山梨県）

して、本気で考えてみたが、どうしても踏み切れなかった。大自然の中、色々なターゲットはたしかに魅力はあるのだが、やはり自分が目指す愛犬とともに行う狩猟ではないと思った。

誰にも気がねせず、大自然の猟場で堂々と猟がやりたくて、あらゆることを考えた末に「愛犬とともに行う猪猟が一番」であることに気づき、北海道行きもやめたのである。ガイドにどんな大物を撃たせてもらうよりも、自分で育てた犬群の猟芸を楽しみながら、納得いく狩猟こそが最高であると思ったからだ。

しかし、犬群での猟場は限られており、その確保は大変であった。

猪猟を始めた頃は、朝3時に家を出て、何時間も高速道路を走り、やっと目的の狩場に着き、「よかった誰も来ていない。今日こそは…」と、準備を済ませて「いざ放犬」と思っているところに地元ハンターが現れて、「ここは俺の山だ！」とか、「昨日から見切って、イノシシは上から追って来ている」とか、ひどいときには、「犬が咬み殺されても知らないぞ!!」などの脅しから、また何も言わない代わりに、山の裏にマチを張られて、イノシシを撃ち獲られたり、散々であった。

当然のことで、雪など降ったときは、一番目に猟場に立ったのは誰であるか…や、追って行った犬は誰のものかなどは、明らかなことであるのだが…。

実は、このときの対応が全てである。言いたいことをぐっとこらえて、場所や獲物まで「譲る心」が大事である。孫さえ「何でジジがやめなければならないの？」と言うほどであるが。地元の猟人から何と言われようと、何をされようと、ただただ「忍」の一字である。

■「忍」でつかんだ新猟場

そんなことを5～6年も続けていると、相手もその道のベテラン狩人達である。だてにライフルを持ってイノシシを追っているのでもなければ、道理がわからないはずもない。必ず何か折り合うきっかけが見つかるものである。要するに話し合い、わかり合えるときがくるのである。このときをガッチリつかむも逃すも、これまた自分の心がけ次第である。頑なにならずに心を開くこと、つまり「譲り合う精神」が大切なのである。

幸いに私は、群馬・長野・山梨のそれぞれの県に堂々と狩れる猟場ができたところであるが、実に長い我慢の「産物」である。振り返って考えてみると、「決して争わないこと」と、「猟場は使わせていただいている」の気持ちで、いかなるときでも「感謝の念」を持ち続けることが大切だと思う。

大物猟人にとっての良い猟場は、まさに「イノシシの成る宝の山」なのである。地元の猟人もまた、この山には決して他の猟人を受け入れたくないのは当然であり、守る手段は別として、その立場で物を言い、行動していただけのことで、共猟で、獲物を前に一杯やり、猟談義でも交してみると、決まって皆が同じ思いの良い人達なのだ。

勇気を持ち、ただ獲ることだけにこだわらず、そこまで持っていかなければ、限られた良い猟場を持つことも守ることも楽しむこともできない。そのことを猟人一人ひとりが認識すべきときではなかろうか。必ずお互いの心がわかり合え、「なすべきこと」にも気づくはずである。かけがえのない狩猟を将来につなげるという課題も、この限られた大切な「猟場を守る」ことなのである。

この課題は、掘り下げればきりがないほどの難題で、自然破壊まで含めて、取り巻く状況は非常に厳しいものがある。まず、私達猟人が行政の策を待つまでもなく、一人ひとり目標を立てて、目の前のできることからやり始め、粘り

人畜無害の大切な「後続犬」（8兄弟）

強くやり抜く以外はない。

その第一は、私利私欲を捨てることである。その二は、安全で安心の狩猟を心がけ、決して他人に迷惑をかけないこと。三番目は、「共存共栄」の精神のもと、種の保存に心を配り、猟場を荒らさないこと。最後に、猟法を守り、猟人としての常識を持つことである。順番は別として、これくらいのことは、いつも心に留めておくようにしたいものである。

そして猟場にあっては、地元猟人も外様も、イノシシやシカに至るまで「運命共同体」であることを忘れてはならないと思う。実際に現場に立つと、「罠あり、猟犬注意」が至る所にあり、どの沢にも犬猟者が入れない所とか、年中大物の駆除が行われたりしていて、目にあまるものも多い。これらは、ごく一部の常識のなさから起こることであり、全体的な狩猟界の流れに対し、目先の効かない自殺行為に等しい。

単独猪猟を支える一軍のメンバー。写真左：(左)ケン，(右)ミス号。写真右：(左)富士雄，(右)サクラ号

■猟場を守る種の保存

私はかねて「子猪ぐらいは逃してやりたい」と思っているが、「種の保存」は狩場を守る大切なことである。立場立場で、物事の見方は色々あるとは思うが、猟人は素直な心で、自分の猟場からイノシシ(獲物)が姿を消したときのことを考えてみてほしい。かつての鳥猟のように、実に淋しい思いをするはずである。時代を越えて「良い狩場」とは、獲物の多い豊かな自然の残る山である。良い狩場を守るということは、とりもなおさず「狩猟そのものを守る」という重要なことなのだ。

次に猟場の状況であるが、私が通う山は全体的には良い猟場である。イノシシは決して多くはないが、良い犬ならそこそこ獲れるので、十分楽しめる。山は大山で1500～2000m以上ある。頂山付近は全て国立公園で、大物は適当に保護されることになるので、居なくなってしまう心配はない。

決して獲りやすい山ではないが、私が入る関東地方の山は、下草がなく杉林も多いので、イノシシは山裾の人家近くに寝ていることが多い。

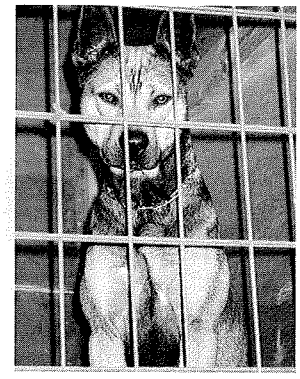
そんなことからも、犬群は人畜無害の良い犬がますます必要であり、そのような犬がないと猟にはならない。人家近くのイノシシも、追われるとだんだんと山の頂上に逃れるようである。私は単独猟なので、朝6時30分頃に入山すると、たいていの場合9時頃までには結果が出ている。2ラウンドやっても昼前には終わる。

■新規猟場の開拓は

次は、「新規猟場の開拓」である。いつもの山の頂上辺りで見る山並みや猟地図を頼りに、車でゆっくり林道を走りながら注意深く「イノシシの渡り」や、「掘りの跡」を探すのである。経験を重ねれば、山並みの林と沢などのバランスで、犬のかける所まで想定できるものである。特に単独猟での「隠し猟場」は、私の得意とする「俺流の猟犬群」では欠かすことのできない所で、暇をみては探して補充している。

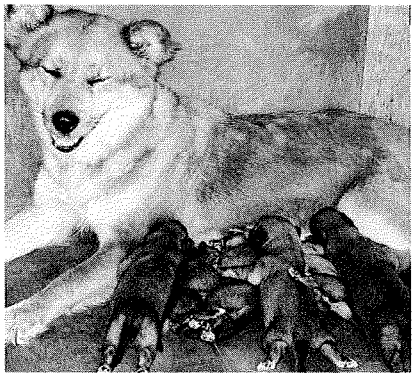
人家近くで、畑にはトタンなどの防柵があり、グループ猟では狭すぎる所、つまり単独猟なればこそのピンポイント攻撃ができる小さな猟場で、放犬するには誰もが躊躇するような所である。単独猟では、このような人知れずほくそ笑む「隠し猟場」を多く持つことも大切で、遅くなっての出猟とか、半日猟にはとても都合がよく、猟果も挙がるのである。

大猪をドーンと道に引き出せるのも、このような場所であり、堪えられない猟場である。群馬県の下仁田近くの山は、皆このような所であり、毎年一人でニヤニヤ笑える極上の「隠し猟場」になっている。



若犬のホープ，ゲン号(一軍)

種牡サム号(ブルーチック)


次世代へ期待の子犬と母犬クマ子号

次世代へ期待の子犬と母犬ジュリー号

■情は人のためならず

最後に、行政に望むことは山ほどあるが、基本的には現行どおりでよいと思っているが、全体的には、「罠猟人」と「犬猟人」の関係をよく考え(地域の特例も含めての)、現実に即した自然のバランスの上に立った立案であり、実戦に即した猟法の確立を是非お願いしたいものである。年中罠を掛けて根こそぎ獲るとか、また駆除がどうしても必要であるというのであれば、より成果が挙がり、猟人全てが楽しめる平等の猟期の延長ただ一つである。最近、各県で広がりつつある「猟期の延長」を是非お願いしたいものである。

さらに、狩猟が明日につながるような理念を行政やリーダー的立場の者が真剣に推し進めることで、猟人達の考え方や行動を良い方向に導くことができ、かつての「紳士の狩猟」を取り戻すことができ、明日につながると思う。「情は人のためならず」(情をもって人様に接していれば、巡り巡っていつか必ず自分も情けを受ける)であり、この心情は現在の狩猟にぴったりの名言である。

殺伐とした現代にあって、人様にも愛犬にも、そしてイノシシにまでも是非持ち続けたい猟人の心である。猟人皆がこのような心情で、「これぞ猟人の常識」というような良い流れが生まれれば、必ずやあの良き時代の(赤地に黒線のシャツ、黒皮チッキ姿の)狩猟が取り戻せ、万人から認めてもらえると思うのだが…。

その日が来るを信じて、私達は「猟法」をきちんと守り、「猟場を守る」ことで、何としても「理想の猟場」を未来に残したいものである。孫、その子の代へのプレゼントは、「イノシシの成る、心を癒やせる宝の山」である。どうせ持つなら大きな夢が一番だ。そして、猟場を守り「森の番人」として、その場に立つからには、バリバリの現役猟人であり、若い猟人の道標となれるよう、頑張りたいと思っている。

「マタギの由来説」に終止符か?昭和マタギのこだわりの話

(自称・昭和のマタギ)三重 奥 和道

■親の話と、なすびの花は…

戦後60年が経ち、先の大戦ではたくさんの日本の兵士が見知らぬ国の戦地で亡くなりました。その魂が蛍になって、今年の夏も日本に帰ってきましたが、彼らは祖国のため、また家族を守るために死んでいったと思います。彼らが守ったつもりの日本の現状が、蛍の目にはどう映ったのか、60年の長い歳月が今のような日本に変えました。

連日のニュースでは、蛍には想像もできないようなことばかりが流れます。平気でわが子や、親兄弟身内までも容赦なく殺し、また、他人をゲームのごとく傷つけたり殺害したりしています。これは社会状況の悪化もありますが、「人」として育っていない者の犯罪と言うほかありません。子供を育てられない親、また、親の言うことを聞けない子供、そういう親子関係